

コウヤマキという木をご存知だろうか？ 庭木としても植えられ、寺院に多く植えられているので、きっとどこかで見られていると思うが、裸子植物の針葉樹に属する。名前の由来は「高野槇」で、高野山に多く見られ、ここでは聖樹とされており仏事に用いられているが、花の代わりに使われるそうだ。枝につく葉がスポーク状になっているので、英名は Umbrella pine といい、まさにコウモリ傘のような形態をしている (図-1,2)。ただ、マキ、イヌマキというのもあり、一見似ているが、植物学的にはやや異なっているので、一科、一属、一種の植物であり、それは葉組織の構造にも現れている (図-3)。

### 特徴的分布

この植物がユニークなのはその分布で、本州、四国、九州に自生しているが、その分布が飛び飛びであることである。名前の由来の高野山の主要な樹木だが、木曾の山林でも重要な構成種で、ヒノキ、サワラ、アスナロ、クロベと並んで木曾五木の一つに数えられている。ところが、原生のものはフォッサマグナには見られないとされ、その理由は元々本州に広く分布していたのが、フォッサマグナに海が入り込んで本州が分断された第三紀中新世 (2000～3000 万年前) に、その分布が途切れたとされている (前川 1978)。木曾山脈からいきなり、東北の朝日山系に飛んでいる。分断後、フォッサマグナは八ヶ岳などの火山活動で埋まり、陸地化しても、分断した各地の個々の集団は制限を受け、分布は狭められていったようである。その要因は環境変化であるとされている。

地球の歴史を見ると、もっと興味深いことが知られている。中生代白亜紀 (約 2 億年前) には北半球に広く分布していたことが、化石の証拠から知られており、ロシア、ヨーロッパから見出されている (加藤・海老原 2011)。ところが、地球環境の激変によりその分布域を狭め、日本列島だけに残ったという点でかなり珍しい植物である。日本にしかないということは日本固有種ということになる。学名は *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. Zuc. であるが、属名の



図-1 コウヤマキ

葉は放射状に広がっている長野県茅野市国際スケートリンク「ナオアイスオーバー」の東側のコウヤマキの列を撮影



図-2 コウヤマキの球果

図-1 のコウヤマキで撮影

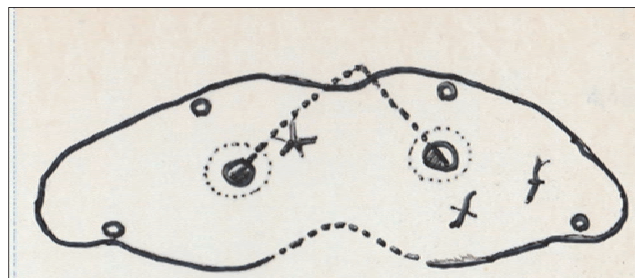


図-3 葉の横断面

前川 (1978) のコウヤマキの葉の断面図 針葉樹の分類上の鍵とされる中心柱が葉の中心に対に存在するが、2葉が合着されたのみなされている。

意味は Umbrella pine と同意である。本連載 14 回目に紹介したツェンペリー (Carl P. Thunberg) により最初に認識され、15 回目紹介のシーボルト (Phillip F. v. Siebold) により、植物学上の位置づけがなされたことが学名に反映している。そして、そのシーボルトは来日してこの木を見て大変感激する。というのは、彼はヨーロッパではこの木が化石で出ることを知っていたからであり、まさに生きていた化石との遭遇ということになったからである。

## 古墳の棺として

このコウヤマキは、そのほかにもユニークな特性が知られている。古墳時代の棺に用いられていることは考古学知見として広く知られており、特に西日本ではほとんど全てそうであるということである。これと呼応しているかのように、「日本書紀」には素戔嗚尊の項で登場し、一書に曰くとして「椀は以ってうつしみ蒼生の奥津棄戸にもち臥さむ具にすべし」とあるが、このマキはコウヤマキであるとされているので、日本書紀の記述は古代の習慣を反映しているといえるであろう。さらに、これと関連して興味あるのは、百済の武寧王の棺がコウヤマキであることである。没年が523年であることは、その古墳から墓碑銘が出ていることから明らかになっているが、百済の他の古墳にも複数の例があるそうだ。ということは、コウヤマキは朝鮮半島には生育していないので、日本から運ばれたことは確実で、巨木がどのように運ばれたかについてはおおいに想像が掻きたてられる。なお、済州島には自生しているということだが、当時は耽羅という独立した国だったので、日本から運ばれたとしてよいであろう。この武寧王は日本書紀に何か所も登場し、生誕が九州の唐津市近くの各羅島（加唐島）であるので、諱斯麻はそれに由来すると述べられ、その嶋君誕生説話は雄略天皇の項に登場する。古代天皇の中で出自がかまびすしい継体天皇の項には、武寧王死没の記事があるが、その没年は墓碑銘のそれと一致している。大和朝廷は朝鮮半島の百済、新羅、高句麗とはそれぞれに深い縁があるが、微妙な関係にあり、時代ごとに友好と反撥の関係にあることは歴史学の教えてくれることである。この時期百済とは蜜月関係にあったといわれているが、その例証の一つといえるであろう。そして、この武寧王の系統は渡来人として大和にあり、実際、桓武天皇は即位に際して、自らの妃高野新笠は武寧王を祖先としていると、即位に際して特に述べていることが知られている。

ただ、より根源的な疑問としてコウヤマキがなぜ棺に好ま

れたかについて考古学は教えてくれてはいないが、巨木であるということは一つの要件であると思うが、かつてはもっと広く繁茂していたことが想像される。また、棺は船形であるという見解があることは一つのヒントであろう。さらに、江戸時代にかけてられた千住大橋の橋桁が明治になって調べられたところコウヤマキであり、また、風呂桶として最高の素材もコウヤマキであるということは、一つの示唆を与えてくれるように思う。樹脂の成分により、材が腐朽しにくいということである。なお、コウヤマキは耐水性のほかに防火にも役立っているといわれている。実際、高野山の持明院は1880年に焼失したが、隣の不動院が焼けなかったのはコウヤマキのおかげであるといわれている。さらにこれと関連して、イチョウ、サンゴジュと合わせて、火避けの三羽鳥といわれるが、それは関東大震災の後の内務省の報告にある（長田2014）。

今度コウヤマキを見られたときに、こんな歴史を思い浮かべていただくこの木が一層親しみを持って感じられるのではないだろうか。ちなみに、東京大学小石川植物園では入り口を入れて50mほどの坂の途中の左側にある。また、日光植物園では入り口から入って300mほどの洋風の建物で同所では研究室として呼んでいる建物の隣に大きくそびえている木がコウヤマキである。また、秋篠宮家の悠仁親王のみしるしの木はコウヤマキであるが、このことを伺ったのは、日光植物園で用務があった折で、それにあわせてそのコウヤマキにその旨の説明を付けたことは忘れがたいことである。

## 文献

- 加藤雅啓・海老原淳編 2011. 日本の固有植物, 東海大学出版会.
- 前川文夫 1978. 日本固有の植物, 玉川選書.
- 長田敏行 2014. イチョウの自然誌と文化史, 裳華房.